モンシロチョウの古記録

松井松太郎
京都市中京区蛸薬師通堀川東入

'White Butterflies' in Japanese Old Literature

MATSUTARO MATSUI

はじめに　　磐瀬太郎

昭和33年（1959）北隆館から発行された江崎先生の「随筆集」の中に，「あおまつむし」（村，昭和22年11，12月合併号所載）という一篇がある．その中で"ある農学博士の最近の著書を見ていたら，染井吉野という桜は古来日本人の最も愛した桜であると書いてあるのに驚いたが，この桜のように，明治以後に普及したものでさえ，既に現在の人達は，最も日本的な自然物だと思い込んでいるのである"という一節があった．そして"動物の中でも小さな昆虫の如きものは，人の眼を逃れて侵入し，いつの間にか繁栄しているものがたくさんある"としてアオマツムシの例に入っておられる．

ところで，われわれが最も普通種であると思っているモンシロチョウも，案外新しい渡来種ではないかということに思い当った．植物ではクローバーや月見草が渡来種であるのだから，普通であるということは，古い昔からあったという証拠にはならない．今日アメリカ各地のキャベツ畑を荒しているモンシロチョウが，北アメリカに入ったのは，わずか100年くらい前のこと，オーストラリアに入ったのはほんの30数年前にすぎないこと，も考え合わせて見る必要があろう．

モンシロチョウが始めて北アメリカで採集された記録は，1860年カナダのケベックで鳥獣剝製商ウィリアム・クーパーが数頭採集したもので，おそらくそれより数年前にヨーロッパから輸入されたキャベツとともに，たった1頭の交尾済の♀が渡来したためといわれている．1864年セント・ローレンス河北岸をマレー・ベーに拡がり，1865年には合衆国のメイン州に入り，1868年にはニューヨークに現われ，1880年には既に大陸深くカンサスに達し，1884年ミゾリーの上流を侵すと見る間に，1886年にはコロラド州のデンバーを過ぎ，ついに1890年代，太平洋岸に到着した．ホーランドは1898年，バタフライ・ブックの中で，"太西洋から太平洋に到るすべてのキャベツ畑は，今やこのモンシロチョウに占領されてしまった"と記している．モンシロチョウの北アメリカ侵入によって大打撃を受けたのは，もちろんキャベツ畑の持主であるが，とばっちりを受けたのは，先住のエゾスジグロチョウと，アメリカモンシロチョウ *Pieris protodice* である．この2種は当時太西洋岸諸地方で，現在よりはるかに優勢で，広い地域にわたって分布していた．スカダーは1857年頃には，エゾスジグロチョウはマサチュセッツ州のケンブリッジ大学構内に群っていたと記しているのに，現在では遠くバークシャまで遠征しなければ採集できない．そして発生地がせばめられると同時に，習性まで変わって，森の中の野生植物に退却し，きわめて弱気になってしまった．アメリカモンシロチョウも同様で，内陸深く追い込まれ昔日のおもかげはない．これに反してモンシロチョウは畑の作物のみならず，森林のちょっとした伐採跡にも繁殖するようになった．

このようにモンシロチョウが他の2種の同属を駆逐したのは，一口にいえば生命力の強さであるが，なお2，3の細かい所説を拾ってみよう．いずれは近代的な生態学のライトをあてて吟味してみる必要のあることである．ある説によると，アメリカモンシロチョウの幼虫は，食草の外側の葉だけを好む．それだから何所でも好き嫌いなく食べるモンシロチョウと，とうてい太刀打ちはできないのだという．またある説によると，モンシロチョウには1883年ライリーがヨーロッパから輸入したアオムシコマユバチ等の天敵がいるが，これらのヤドリバチはもちろんモンシロチョウを倒すが，数の多いモンシロチョウから出る数の多いヤドリ

バチが，他の2種のシロチョウを巻きぞえにして倒す割合が徹底しているのだという．ある意味でコマユバチはモンシロチョウのために領地を拡張してくれているわけである．

さて日本ではモンシロチョウとスジグロチョウの関係が目につく．モンシロチョウが畑のチョウで，スジグロチョウが山地のチョウであるという一般論が，採集経験上成立つが，高橋真弓氏が調べたところによると，モンシロとスジグロ合計に対するモンシロの占める割合は，三箇所の耕地でそれぞれ 95，84，100%，二箇所の林側 および一箇所の林内 でそれぞれ 26，44，7％であった（モンシロチョウとスジグロチョウの棲みわけについての小観察，駿河の昆虫 22号，556〜562頁，1958）．もちろん高橋氏はこれで結論を急いでいるわけではないので，私が勝手に自分の経験的結論の裏づけに利用したものにすぎないが，よく大勢を示す数字である．

一方，長谷川仁氏（新昆虫11巻4月号39頁，1958）は1頭のスジグロチョウを追う数百のモンシロチョウのことを報告して，“私の推定に誤りがなければ，これはまさしくモンシロがスジグロを畑の外に追い出そうとしているのである．その畑（都下久留米村のキャベツ畑）は2反歩ばかりで3方雑木林でかこまれていたから，追うモンシロの大群は，ちょうど敵機に執拗に食い下る戦闘機のように見えた”と書いておられる．これは近来にない大ヒット的報告であると思っていたところ同年12月号の新昆虫ムシペン欄に，三重県の鳩岡文哉氏が同様の報告を2例示された．よく気をつけて見れば何所でも見られるものかも知れない．こうなってくるとモンシロとスジグロは，すみわけなどという，なまやさしい静態的（？）なものではなく，正に強種が弱種を駆逐しつつある一断面ではないかということもいえそうである．長谷川氏も最後に“いいかえればモンシロのみが畑の栽培植物を独占して，日本の最も普通種になったいきさつをぜひ究明していただきたいと念願している”と書いておられる．

さて，モンシロチョウという名は同氏によれば，明治15年（1882）頃始めてつかわれたものとなっているが，モンシロ自体はいつ頃からわが国に登場したものであろう．BOISDUVAL が *crucivora* と命名したのは天保7年(1836)で，日本でとれたチョウに命名された種の小名としては，1782年のクロアゲハ，1824年のナガサキアゲハ，ルリタテハについで第4番目で，ジャコウアゲハとタイ記録である．標本として古いものは，合葉文山（1797〜1857）がとって昭和16年頃まで香川県善通寺に現存していたものが，おそらく最も古いものであろう．武蔵石寿の標本の中にあるとしても，これは天保年間（1830〜1840）のものであるから，いずれも BOISDUVAL の命名年代とほぼ同じ頃である．絵画として残っているものは，おそらく円山応挙のものが最古で，制作は安永丙申即ち 1776年と思われる．さらに文献の上ではいかがであろうか，これはモンシロチョウという名称が明治年間についたことでもあり，はっきり同定するのは，なかなか困難と思われる．一方モンシロチョウの好物のキャベツが，わが国に入ったのは明治初年といわれているが，ダイコンは 1500年ほど前中国・朝鮮を経て既に渡来していた．アブラナの方はいつ頃からあったものか，日本種の *Brassica rapa* ssp. は非常に古いものと思われる．結局，いま私の手許で知り得る日本のモンシロチョウの最古の記録は，円山応挙が 1776年にかきのこした絵ということになるが，それよりどのくらいさかのぼることができるであろうか．

ま え が き

Pieris rapae crucivora BOISDUVAL 1836 に，モンシロチョウという和名がついたのは，明治になってからである．それ以前の時代に，この蝶は，どのように記録されていただろうか．Ⅰ．成虫の呼称　Ⅱ．絵画にあらわれた成虫　Ⅲ．食草　Ⅳ．幼虫に区分し，古記録の調査をこころみ，識者の叱正をこうことにした．

この小考に引用している中国古典の昆虫・植物と，日本産との種・亜種の相違を精査することは，論外とした．

つねに懇篤なご教導をいただく農業技術研究所，長谷川仁先生に，あつく御礼を申しあげ，また，この考証のために巻頭言と，ご鞭達をたまわった，日本鱗翅学会会長，磐瀬太郎先生に深く謝意を表します．

I. 成 虫 の 呼 称

1　素蝶（紀朝臣麻呂，701～705）

わが国古代人がもっていた蝶の知識の背景には，古代中国文化の影響を，すくなからずうけていたのであって，わが国の古代人の作った漢詩に，*Pieris* を「素蝶」という語で詠じたものがある．「素」（ＳＯ）は呉・唐・漢音で，「もとのまま」との意であるが，白地の意を派生し，平安期末成立の『類聚名義抄』や，室町期はじめ書写の『平他字類抄』（上，光彩）に，「シロシ」の訓読を残している．したがって，「素蝶」は白い蝶の義である．中国の詩文にその用例をたずねると，梁の劉孝綽（481～539）が，「素蝶を詠ず」と題したもの，また，北魏の温子昇（？—547）が，「花蝶を詠ず」と題して，「素蝶，林に向いて飛ぶ」などと，朗詠したものがあり，わが国では，最古の漢詩集である『懐風藻』（天平勝宝３年成立，751）に，正三位大納言紀朝臣麻呂（きのあそみまろ）（正三位大納言になったのは大宝元年，701であった．慶雲２年歿，705）が，「階梅，素蝶を闘わしめ」と閑吟し（図１），おなじく漢詩集の『経国集』（天長４年序，827）には滋貞主が，「素蝶，翩翻として廻るを倦ず」と詠吟している．

○正三位大納言紀朝臣麻呂一首 年四十七
五言春日應詔一首
惠氣四望浮重光一園春式宴依仁智優遊催
詩人崑山珠玉盛瑤水花藻陳階梅闘素蝶塘
柳掃芳塵天德十堯舜皇恩霑萬民
○文武天皇三首 年二十五
五言詠月一首
月舟移霧渚楓楫泛霞濱臺上澄流耀酒中沉

図１　『懐風藻』上田秋成跋，寛政５年（1793）刊本

2　野蛾（源順，934）

源順（みなもとのしたごう）（911—983）の『倭名類聚鈔』（承平４年頃成立，934）に，「兼名苑にいう．蛺蝶の一名は野蛾．形は蛾に似て色白きものなり．」（下総本・元和刊本）とある「野蛾」の語について，考えてみよう（図２）．

一体，古代の漢語や国語のさす蝶と蛾の識別範囲は，現代にいう蝶亜目の蝶と，蛾亜目の蛾をあらわす語とは，やや，異なって，両者の区分範囲の寛容性が大きいことは，よく知られている．わが国平安期末に成立した『類聚名義抄』（東寺観智院本）に，「蝶」の字を注して，「蛺蝶蛾類カハヒラコ」とあり，「蛺蝶は蛾類なり」，または，「蛺蝶と蛾類をカハヒラコと呼ぶ」の意であろう．（「蛺蝶」の本来の語義は，蝶の総名であり，現代，タテハチョウの科，亜科，種の和名に，「蛺蝶」の漢字をあてるのは誤りである．）ついで平安期末に成立し鎌倉時代に増補された『伊呂波（いろは）字類抄』（10巻本）比（ひ）部，動物には，「蛾蚕（ヒヒル）老化作飛虫（カイコの成虫の意）蛺蝶同」とあり，蛾と蛺蝶を同義とし，ヒヒルと読ませており，『本草綱目』（中国の本草書，初版，1596）蛺蝶の条に，「蝶は蛾類なり．大なるを蝶といい，小なるを蛾という．」とある蝶蛾の見解に先駆している．

蛁蟟 蟬鳴是也
陶隱居本草注云蛁蟟
茅蜩 爾雅注云茅蜩一名蠽
夏蟲 莊子云夏蟲不可以語冰
小青蟬也
蝶 兼名苑云蛺蝶一名野蛾
色白者也
緑蝶 兼名苑云緑女一名姥蝶 緑蝶也
紺蝶 兼名苑云紺幡一名童幡

図２　『倭名類聚鈔』慶安元年（1648）刊本

その反面，やはり，古代から蝶と蛾の識別に対する知見も，ずっと累積されており，蛾類が夜間灯火にあつまる特性を熟知した結果，火虫（『日本書紀』・『万葉集』），火取虫（『釈日本紀』），爛蛾（『令義解』序文・『本朝文粋』），夕蛾（『令義解』序文）などと，名づけているのがみられ，日中，野外で活発に行動する習性をもつ白い蝶を，「野蛾」と呼称し，それらとは区別していた．白地のシャクガには昼間飛翔するものもあるけれど，「形は蛾に似て色白きものなり．」は，主として *Pieris* を指しているものであろう．

ところで，「形は蛾に似て色白きものなり．」が源順（10世紀）の創説でないことは，狩谷棭斎（1775—1835）も，『箋注倭名類聚抄』（文政10年稿，1827，明治16年刊，1883）にのべており，『兼名苑』（中国古典，失われて現存しない）の原注を流用したものであろうとしている．３世紀末に西晋（中国）の崔豹の撰した『古今注』（図３）には，「蛺蝶の一名は野蛾．一名を風蝶．江東にてこれを撻木という．色白く背青きもの是なり．」（『初学記』

蝘蜓一名龍子一曰守宮善上樹捕蟬食之其長細
五色者名爲蜥蜴短大者名蠑螈一曰蛇醫大者長
三尺其色玄紺者善螫人一名玄螈一曰綠螈也
蜻蛉一名青亭一名胡蝶色青而大者是也小而黄
者曰胡梨一曰胡離小而赤者曰赤卒一名絳騶一
名赤衣使者好集水上亦名赤弁丈人
蛺蝶一名野蛾一名風蝶江東呼爲撻末色白背青
者是也其大如蝙蝠者或黒色或青斑名爲鳳子一
名鳳車名鬼車生江南柑橘園中
古今注　卷之中　八

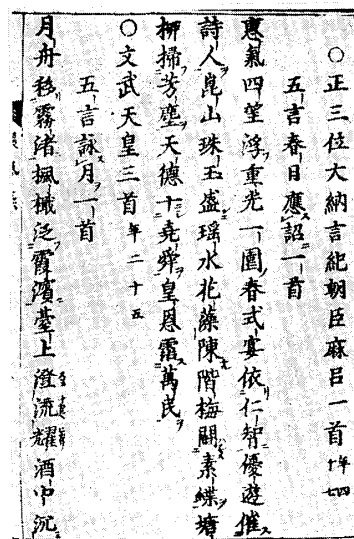
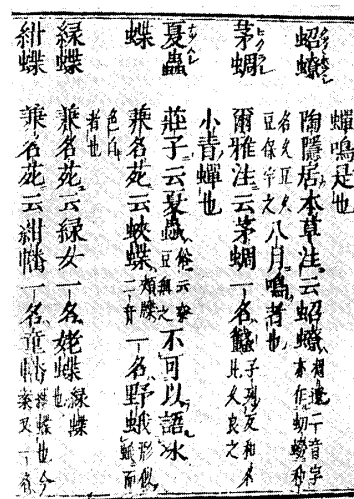
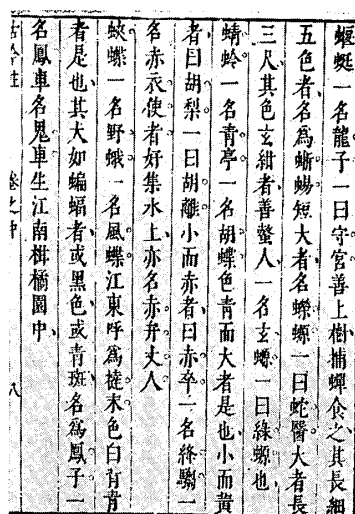



図3 『古今注』寛延2年（1749）和刻本

所引）と，おそらく『兼名苑』に類似していたであろうと思われる記載があり，源順は，これをも参考にみていたであろう．

さて，「野蛾」の語の用例であるが，わが国では，『伊呂波字類抄』（『色葉和名』を補訂，鎌倉初期成立，10巻本，天，動物）に，「野蛾．形は蛾に似て色白きなり．」とあり，『温故知新書』（文明16年成立，1484，前田家本，下巻）に，「野蟻．蝶に似て色白し．」とある．『伊呂波字類抄』の「野蛾」は，『倭名類聚鈔』の影響をうけ，『温故知新書』の「野蟻」は，『新撰字鏡』（昌泰年間成立，898～901）に，「蛾．柯我反（反切という．古代の中国や日本では，字音をあらわすため，他の平易な2字をもってする．すなわち，はじめの字の声と，次の字の韻とを合わせて一音をつくる）螘なり．蟻なり．安利．また，比比留．」とみえるように，蛾の一音を「ギ」，蛾の字義も，蟻に通じることから，蛾の字を，蟻に置きかえて通用をみたものではなかったか．上記の『古今注』の「撻木」の名は，撻末（『太平御覧』・『初学記』宋本・『淵鑑類函』・『古今図書集成』・『百子全書』），撻朮（『蘇氏演義』）などとも書かれており，書写の誤りに起因したものとみられる．

和漢諸説の類聚書『古今要覧稿』（屋代弘賢総判，天保13年成立，1842）は，巻第554，虫介部に，『卓氏藻林』（中国の卓澂甫著，万暦庚辰序，1580）の本文をかかげ，

「按（ずる）に，ここに撻木に作るは誤れり．古今注・本草綱目・其（の）他諸書，撻末に作るによれば，木は末なる事著明なれば，たまたま卓氏の失作としられたり．」（国書刊行会本）

とするが，『卓氏藻林』の「撻木」は，『初学記』を出典としたもので，依拠したテキストの相違に他ならない．また，『本草綱目』巻40，虫部，蛺蝶の条には，「古今注に橘蠹蝶に化すという．」とあるばかりで，「撻末」の文字はないから，これらは『古今要覧稿』の錯誤とみたい．

『古今注』には「風蝶」という語もみえているから，撻木（撻末・檀末・撻朮）の語とともに，ふるくわが国に舶載されたけれど，国語化しなかったもので，『倭名類聚鈔』をはじめ，鎌倉期・室町期・江戸期の字書類にも通用した形跡はない．

狩谷棭斎は『箋注倭名類聚抄』巻8，鳳車（鳳蝶アゲハチョウ属）の条において，『古今注』にある「風蝶」の文字は，「鳳蝶」の誤りだとしているが，中国では，梁の簡文帝や杜甫の詩に活用例があるから，けっして，「風」は「鳳」の誤字ではないのである．

3　粉蝶

粉蝶の呼称は，鎌倉期末に成立した『帝王編年記』に初出している．同書巻第22，高倉院御宇に，

「治承二年（1178）戊戌八月．叡山坂本に粉蝶雨の如く降る．高雄寺魔滅の時かくのごとし．」とある．粉蝶の呼称は，8世紀頃からの中国の詩文にみられる．時代はくだって，松岡玄達の博物学後継者，小野蘭山（1729—1810）は，「粉蝶」を白い蝶類と解した．その講義録，『本草綱目紀聞』に「白を粉蝶」，『本草綱目訳説』には「白色なるを粉蝶」となし，『本草綱目啓蒙』（第1版，享和3年1803～文化3年刊1806．第2版，文化8年刊，1811．第3版，弘化元年刊，1844．第4版，弘化4年刊，1847）は，「色白き者を粉蝶と云う」とのべた．蘭山のいう粉蝶の呼称は，中国福建省泉州地方志である『泉州府志』（万暦40年，1612，と乾隆28年，1763の2書あり）を典拠にしたのである．

小野蘭山の孫，小野蕙畝のあらわした『芳斎虫譜』や，蘭山を師とした山本亡羊（1778—1859）の『亡羊本草記聞』も同説であり，水谷豊文と林清達共著の『物品識名』（文化6年刊，1809）にも，「粉蝶，白色のてふ」とみえる．

4　はねの「おしろい」（里謡の形容，1763）

江戸時代の歌謡類に「おしろい」のはねとうたわれているものは，*Pieris* をさしていると思われる．「おしろい」のように白い鱗粉のある蝶の意による．刊行された歌謡書にみられるものはつぎのとおりである．

「ちらちらちら，花壇の蝶のおしろいも羽に残して，草がくれ」上方唄『春富士都錦』(宝暦13年刊，1763) 所収の「初桜浅間嶽」.

「ちらちらちら，花壇の蝶の白粉も草に残して，きえぎえと」明和・文政頃の常盤津，富本節『桜草集』所収の「卯華姿雪曙」.

「花壇に飛こふ(とびかう)秋の蝶，手にもとられず，ちらちらちら，風に乱るる白粉もはねに残して，草がくれ」富本節『桜草集』所収の「其俤浅間嶽」，および，清元『柏葉集』所収の「初霞浅間嶽」(天保5年初演，1834).

「蝶の翼の白粉も，派出に浮名の花より花に」『新編江戸長唄集』所収の「かみまつりししのひきもの」(文化14年初演，1817). などとうたわれ，したしまれてきたのであった.

なお，俳諧の季語として，江戸時代の俳諧作法書『手挑灯』(桐淵貞山著，延享2年跋，1745) 2月の項には，「白蝶」の名がみえている.

5　白蝶の大群

しかし一方，白蝶の群飛の古文献を吟味してみると，チョウではなくカゲロウ Ephemeroptera を意味したものが多いので注意を要する. すなわち，わが国における白蝶の大群の記録を列記すると，

『野史』(嘉永4年序，1851) の寛永元年 (1624) 6月15日の条に，

「戊戌暁. 白蝶数万，伏見稲荷に群集す. 飛びて五条橋上に至る. 日の出るまでに飛散す. 考亮記」とあり，丸山元純の『越後名寄』(宝暦6年自序，1756) 巻25，蜉蝣の条には，

「形蚕蛾に似て白く，大（き）さ六七分，六七月頃，川上二三尺許を数町続（い）て飛行す. 一時ばかりにして一も残らず皆死して，水上に落つ. 夕を待たずと古人の云（え）るむべなる哉.」とあり，鈴木牧之の『北越雪譜』(天保6年刊，1835)「渋海川さかべつたう」の条には，

「春の彼岸の頃，幾百万の白蝶，水面より二三尺はなれて，羽もすれあうばかり群（れ）たるが，……其（の）蝶の形は燈蛾ほどにて白蝶なり.」とあり，赤松宗旦の『利根川図志』(安政2年刊，1855) 巻1，物産の条には，

「白蛾夥しく群し，上流に向いて飛ぶ. 日出でて後，死し落ちて水面布の如し. ……その形蝶に似て身長六七分，頭は二白鬚あり，長（さ）五六分，尾に二毛あり，長（さ）一寸二三分，羽左右并せて一寸許，白色，……」とあり，図を載せている. 斎藤幸成の『武江年表』巻10，万延元年 (1860) 6月の条によれば，

「晦日，本所竪川通（り）に数万の白蝶群（が）り来り，水面に浮び或は舞う. あだかも雪の如し，その内五ツ目辺甚しかりしとぞ.」などとある諸記録は，いずれもその性状からみて，カゲロウ類とするのが正しいようである.

カゲロウ類は古く『倭名類聚鈔』蟳の条に記述されているが，室町期に月村斎宗碩が作った歌語辞書『藻塩草』巻12に，「蟳，ひをむし」を説明して，

「旦に生して夕に死（す）と云（え）り. しろきてふのやう也.」といっており，後世になって，貝原益軒 (1630—1714) は『大和本草』(宝永7年刊，1709) 巻14，蜉蝣の条において，『本草綱目』蜣蜋付録の「蜉蝣」の条と，『藻塩草』の記事とを比較考察して，「時珍云う. あるいは曰く蜉蝣は水虫なり. 状は蚕蛾に似て朝に生じて夕に死す. これ，藻塩草にいえる白き蝶のようなりと一物なるべし.」といい，蝶に紛う蟳の正体を，カゲロウなりと喝破している.

Pieris の呼称は以上にみてきたように，文辞用の「素蝶」・「野蛾」・「粉蝶」という漢語や，室町期の「しろきてふ」(月村斎宗碩)，江戸時代歌謡のはねの「おしろい」，本草博物学者の呼称していたものでは，「白」・「白色なる」・「色白き者」(以上，小野蘭山)・「白色のてふ」(水谷豊文・林清達) のほか，「白色なる者」(寺島良安，『和漢三才図会』正徳3年刊，1713)・「今名，白きてう」(畔田翠山(くろだすいざん)，『古名録』天保14年序，1843)・「白の小蝶」(小塩五郎，1831—1894，の『蝶譜』後出) などが知られる. いずれも，はねの色の白さを形容しており，あきらかに他科の蝶と識別していたのである.

II. 絵画にあらわれたもの

最初に *Pieris* を図示した本草博物書は，『本草綱目』初版金陵本 (万暦24年刊，1596) であろうか. その虫部

卵生類下の付図にえがいた蛺蝶は，稚拙であるが *Pieris* の趣きを伝えている．その後に刊行の『本草綱目』(第3版の銭衙版，崇禎13年刊，1640 以降？）では，属名が判然としないまでにかきかえられた．ここに示す図4は，承応2年（1653）和刻の『江西本草綱目』のものであるが，これに続く日本版の『新刊本草綱目』（篆字本とも，1669）や，『校正本草綱目』(貝原本とも，1672）の図は，この承応2年和刻の図とことなり，中国の第3版以降（？）の図にしたがっている．

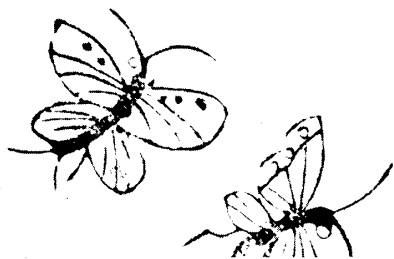



図4 *Peiris* の図，『江西本草綱目』承応2年（1653）和刻本

わが国の刊本では，『和漢三才図会』(寺島良安著，正徳3年刊，1713）に，*Pieris* の図が初出している（図5)．『和漢三才図会』の昆虫図は，先行の『訓蒙図彙』(中村惕斎著，寛文6年刊，1666）より借図するものが頗る多いが，この *Pieris* の図は，『訓蒙図彙』から採りもちいたものではなく，『本草綱目』初版金陵本，あるいは，これを覆刻した和刻本の図が，素地となったと思われる．図4と図5のいずれもは，前翅翅頂付近の黒色部を欠如，『本草綱目』の方（図4）は，きわめて前縁に接近して，右翅に3個，左翅に2個の黒紋を描き，『和漢三才図会』(図5）では，前翅中央より外方寄りに，2個の黒紋を位置せしめ，後翅後縁の黒条を描いているのは，スジグロシロチョウであろうか．『和漢三才図会』の図は，後世になって，『陸氏草木疏解』(淵在寛著，安永8年刊，1779）に模刻された(図6)．

図5 *Pieris* の図，『和漢三才図会』正徳3年（1713）刊本

江戸時代の本草博物家のかき残した虫譜類には，*Pieris* を活写したものがある．幕府の医学館に本草を講じ，画技にすぐれた栗本丹洲（1756—1834）の『千虫譜』(服部雪斎写，文化8年序，1811）は，モンシロチョウは描かれていないが，スジグロシロチョウに2図があり，雌雄交尾中の図と，クモの巣にとらえられた図がみえる．尾張名古屋の本草家，小塩五郎（小塩三居巣(みいす)と号す，1831—1894）の『蝶譜』には，重厚な筆致をもって，モンシロチョウ1♂（図7）と，スジグロシロチョウ1♀（図8）を描いている．

本草博物家のほかに，おおくの画家たちは，*Pieris* とおぼしきものを画いている．その場合，*Pieris* であることはわかっても，モンシロチョウかスジグロシロチョウであるかを判定することは，なかなかむつかしい．西川祐信（1671—1751）の，『絵本真葛が原』(元文6年序，1741．宝暦9年刊，1759．3巻3冊）は，庶民生活環境裡に溶けこんだ昆虫類の生態尽し集であり，子供を抱いた若い婦人が，団扇で *Pieris* を追うている（図9)．前翅の2黒紋は縦にならび，翅脈がみえる．

図6 *Pieris* の図，『陸氏草木疏解』安永8年（1779）刊本

有名な円山応挙の写生帳（明和7年から安永5年頃の成立，1770～1776）のものは，モンシロチョウ8頭をかぞえ（スジグロシロチョウは1頭もない)，4頭は表面，残り4頭は裏面をかいている．

喜多川歌麿（1753—1806）の『絵本虫撰』(天明7年刊，1787）上巻には，ケシの花上に，トンボ1種と白蝶1種2頭を配し，1頭は求蜜し，1頭は飛翔しており，その版画は精彩な色調をほこっている．前翅黒紋列の描写が，不明瞭であるため，モンシロチョウかスジグロシロチョウか区別をつけがたい．

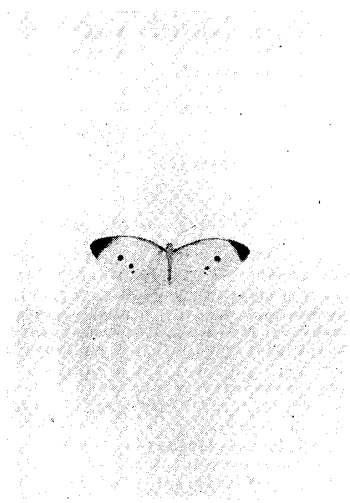



図7 モンシロチョウ夏型♂『小塩五郎蝶譜』国会図書館蔵（長谷川仁先生撮影）

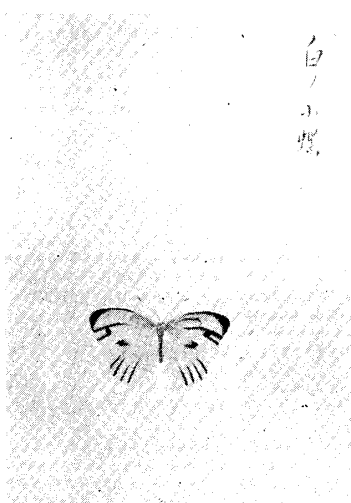



図8 スジグロシロチョウ夏型♀，『小塩五郎蝶譜』国会図書館蔵（長谷川仁先生撮影）

図9 *Pieris* を追う（部分），『絵本真葛が原』宝暦9年（1759）刊本

なお，参考的な資料であるが，前波鉄也氏のご教示によれば，隠岐国分寺に，牡丹に三つ蝶をかいた，月天の花瓶があって，前ばねの中央に1個の太い点をもっているのは，モンシロチョウを具象しているものとも思われる（図10）．明和3年（1766）に，京都から寄進をみたもの．

図 10 月天の花瓶，明和3年（1766）寄進，隠岐国分寺蔵（前波鉄也氏撮影）

Ⅲ. 食　　草

1 *Pieris* の食草

Pieris 幼虫の主食草は，アブラナ科植物であって，白水隆博士と原章氏の『原色日本蝶類幼虫大図鑑』(1960) によれば，モンシロチョウは，カラシナ・ハクサイ・キャベツ（これは明治初年渡来）・ダイコン・カブの諸栽培植物と，ハタザオ・ミヤマハタザオ・イワテハタザオ・ツルタガラシ・イヌガラシ・マメグンバイナズナ（これは明治25年帰化植物，1892）・ワサビ（これは栽培品あり）などの諸野生植物を食し，スジグロシロチョウは，ダイコン・ハボタン・ハクサイ・カブの諸栽培植物と，ハマハタザオ・イワハタザオ・イヌガラシ・コンロンソウ・タネツケバナ・スカシタゴボウ・ワサビ(これは栽培品あり）などの諸野生植物を食するという．モンシロチョウは栽培アブラナ科植物を好み，スジグロシロチョウは野生科植物におおく，食草選択の範囲は，やや異なることになる．

2 栽培アブラナ科植物の来歴

『牧野新日本植物図鑑』(1961) の記するところによれば，アブラナ属のカブ（蕪菁）・カラシナ（芥菜）・アブラナ（蕓薹）・タカナ（大芥）と，ダイコン属のダイコン（萊菔）などが，古く中国より渡来したものという．これらの植物が，わが国古代文献にあらわれた記録を辿ってみよう（図11，12，13)．

まず，『日本書紀』(養老4年成立，720) 巻30，持統天皇7年（693）3月17日の条に，

「みことのりて，天の下に桑紵・利栗・蕪菁等の草木を勧殖，もって五穀を助けしむ」と，カブの栽培を奨励されたことがみえ，『万葉集』(天平宝字3年以後成立，759) 第16の3825歌に，

図 11 蕓薹，『和漢三才図会』正徳 3 年(1713) 刊本

図 12 蕪菁，『訓蒙図彙』寛文 6 年 (1666) 刊本

図 13 萊菔，『訓蒙図彙』寛文 6 年 (1666) 刊本

「蔓菁煮持ち来」とあり，『古事記』(和銅 5 年成立，712) 下巻，仁徳記には，

「山県に蒔ける菘菜」の歌があり，「紀記歌謡」には，

「山城女の木鍬持ち打ちしおほね」とダイコンをうたい，『万葉集』第 14 の 3406 歌には，

「佐野のくくたち折りはやし」と菜の薹を歌う．「あおな」という古語は，次の表にしめすごとく，アブラナ科栽培植物の総名として，通用していた観が深い．また，諸書にみられるアブラナの古名をも一表にまとめた．

阿乎奈の和訓をもつアブラナ科植物の漢名表

書名＼漢名	蔓	蔓菁	蕪菁	葑	生菜	蘴	菘	菘菜	莩根	蕘	大芥	辛芥	幽芥	莵延子	九英	菁奈	菁菜
古事記								○									
正倉院文書																○	○
新撰字鏡	○			○菁也 菰根也													
本草和名		○	○			○			○	○	○	○	○	○	○		
延喜式		○															
倭名類聚鈔		○	○	○													
医心方			○														
類聚名義抄		○	○	○			○芸										
伊呂波字類抄		○冬菁	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		

『魏志倭人伝』(晋の陳寿撰，297 没)，に「倭の地は温暖，冬夏生菜を食す」と日本の内情を記す．
『伊呂波字類抄』の和訓に従えば「アヲナ」である．

畔田翠山（1792—1859）の『古名録』（天保14年序，1843．明治17年刊，1884）の説くところによれば，蔓菁・菁・蔓はカブの葉をいい，蔓菁根・蔓根・菁根と「根」の字を用いるのは，カブの根部をさし，蕪菁子をカブの種子とみなしている．

また，『延喜式』（延長5年，927）内膳司には，カブ・ダイコン・アブラナを栽培するのに，

営蔓菁一段．種子八合．惣単功卅二人半．

営蘿菔一段．種子三斗．惣単功十八人半．

営蕓薹一段．種子一升．惣単功廿八人．

とあり，田地一段に種子何程で，功は何人ということがみえているくらいであるから，『延喜式』のつくられたころは栽培技術も進歩していたものと思われる．また，カブ・アブラナ・ダイコンが，年間どのように連続して作られていたかという角度から眺めてみると，『延喜式』内膳式にある供奉雑菜の条下には，

蔓菁．四升をめあてとす．正月より十二月まで．

茎立．四升をめあてとす．二・三月．

蘿菔根．四升をめあてとす．正・二・十・十一・十二月．

とあり，カブは，春より冬に至って，おいおい奉ったものであり，アブラナは春期だけ，ダイコンは1・2・10・11・12の月に，供奉されていたことが記録してある．

また，この時代には医治用として栽培されており，唐の『新修本草』（顕慶4年成立，659．わが延暦4年，777典楽寮に学修の詔あり）を典拠とした，『本草和名』（図14，延喜18年頃成立，918）・『医心方』（永観2年成立，984）・『康頼本草』（現存のものは室町初期に成立）などが，薬草としての漢和名を，対照させて記載している．

アブラナの古名一覧表

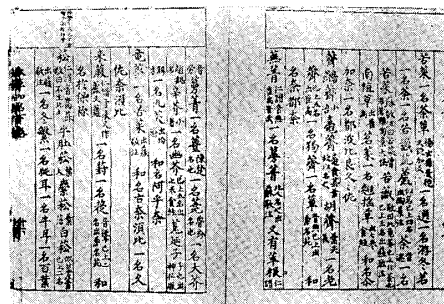
漢和名 ＼ 書名	蕓薹	オチ	葍	茎立・クタチ	ナタネ
正倉院文書				○	
万葉集				○	
新撰字鏡	○		○		
本草和名	○	○			
延喜式	○			○	
倭名類聚鈔	○	○	○	○	
竹取物語					○
宇津保物語					○
医心方	○	○			
江家次第				○	
類聚名義抄	○	○	○	○	蕪菁子
伊呂波字類抄			○		
康頼本草	○	○			

『康頼本草』は蕓薹の和訓を，オチの他に，太天宇（ダテウ）胡具（コク）（『古名録』所引）または太夫（ママ）宇明臭（群書類従本）としている．

また，アブラナは，葉茎を食するのみならず，後世，種子をとって油にするようになったが，大蔵永常の『製油録』（天保7年刊，1836）総論によれば，貞観の頃には「いまだ油菜の事はなかりき」とあるから，菜種による製油のことは，それより以降のことと思われる．

図14 『本草和名』下巻，享和2年（1802）刊本

大浦万吉氏の『日本植物油沿革略史』（1944）には，『製油録』を引用し，「徳川時代中期においては，すでに胡麻油，荏油等は漸次此（の）菜種油のために圧倒される傾となった」（p. 50—52）とあり，菜種油濫觴の年代は詳らかではない．

Ⅳ 幼　　虫

1　螟蛉（=蒼虫，901）

古代中国では，蝶類幼虫の食葉性に着眼したのは列子で，B．C．300前後頃のことである．

甚だ素朴な表現であるが，天瑞第1に，「烏足の根は蠐螬となり，その葉は蝴蝶となる．蝴蝶は胥なり.」(これと同文が，『荘子』外篇至楽第18 にもある）とした．この列子の記載を，唐の段公路は『北戸録』(9世紀後期)に，北宋の陸佃は『埤雅』(1078頃成立）にそれぞれ引用した．『雅埤』は，さらに，「かって園蔬を見るに，その葉，蝶となるものあり．三分の二は，すでに蝶たり.」(蔬菜の葉の三つのうち二つは蝶になったの意）と説明をくわえており，*Pieris* 幼虫の蔬菜を食することを表わしているものとみられる．その後，一層幼虫をくわしく観察したのは，羅願の『爾雅翼』(1174) であって，蝴蝶の条に，「今，菜の中の青虫は春の時にあたりて，屋の壁をはいあるき，あるいは草木の上に糸をもって自らを固め，一夕これを視れば圭角あり，六七日にしてその背柝裂蛻し，蝶となりて出る.」と形状習性を究めた．この記述は，わが国の本草博物家の典拠になるのであって，後にのべる小野蘭山のモンシロチョウ幼虫の記載は，この『爾雅翼』の記事より，さらに観察をすすめたものである．

さて，『日本三代実録』(延喜元年成立，901) 巻第34，元慶2年(878)秋7月甲午朔の条には，倉前の棟木に落雷して，黄雀が蒼虫を口に含んだまま焼死していたという記事であって，ここに「蒼虫」の名が初出する．

『倭名類聚鈔』(承平4年頃成立，934) 螟蛉の条にも，「毛詩注に云う．螟蛉 冥霊ニ音，和名アヲムシ 蒼虫なり.」とあることについては，『壒嚢鈔(あいのうしよう)』(文安2年頃成立，1445．正保3年刊，1645) 巻5の 61 に，「順が和名には，螟蛉をあをむしとよめり.」と記し，(『塵添壒嚢鈔(じんてんあいのうしよう)』天文元年成立，1532．巻8の19も同文)『類字仮名遣』(寛文6年刊，1666) にも，「あをむし，螟蛉蒼虫倭名」とあり，あを(お)むし・蒼虫・螟蛉みな同じであることが知られる．ところが狩谷棭斎は，『箋注倭名類聚抄』(文政10年成立，1827) 巻8，螟蛉の条において，「按ずるに爾雅に曰く，螟蛉は桑虫なりと．毛詩正義は陸璣を引きて亦曰く，螟蛉は桑上の小青虫なりと．是れ毛詩注が桑虫に作れるは疑いなし．源君（源順のこと）引きて蒼に作れるは，恐らく桑と蒼の音近く，かつは，あをむしと訓ずるに因りて誤れるなり.」と述べ，「蒼虫」という漢語の出典がないから，蒼虫は桑虫の誤りだとしている．しかしながら，『日本三代実録』という先行文献に，「蒼虫」の用例あることは看過できないし，また，棭斎のいう呉の陸璣（3世紀前期）の言を，『毛詩艸木鳥獣虫魚疏』(原本は早く佚亡，現行本は，唐代の『毛詩正義』に引用されるものより編輯) 巻下によって再考してみると，桑虫の古意をもつの他に，草萊（草葉）上にいて，これを食草とする鱗翅目幼虫の記されていることは明瞭であり，螟蛉にあおむしの和訓が付されていても，誤りではないと思う．碩学松村松年博士は「三才図会の昆虫」(『本草』第15号，1933) において，『和漢三才図会』螟蛉の条の，「本綱．蚇蠖に似て青く小し．夏に至りて羽化し蛾となるものを螟蛉という.」(この文は，寺島良安が『本草綱目』巻41，木蠹虫の条より抄録したもの）とあるのに対する見解として，「以上の説明によれば蛾の幼虫の様なるも，今日は粉蝶科の幼虫にもこの名称を用いている.」とあり，鱗翅目の緑色の幼虫（ヤガ科のイネキンウワバ，フタオビコヤガ，タバコガ等を含む）をあてておられる．また，本草学の泰斗矢野宗幹氏は，『頭註国訳本草綱目』(第10冊，1930) 蠼螋の条に，「螟蛉」を注して，「螟蛉はあをむし，鱗翅目に属するものの幼虫にして，毛少く緑色を呈するもの.」と端的に述べられてある．

2　小野蘭山とモンシロチョウ幼虫

貞享元年 (1684) に採用された，天文学者，安井春海（晩年の姓は渋川）の『貞享暦』には，仲春月に「菜虫蝶と化す」との語がみえ，歳時の要素として，*Pieris* 春型の発生時の知識を，庶民生活にもたらしていたが，やがて，貝原益軒は『大和本草』(宝永6年刊，1709) 蠋の条に，「菜の葉も青虫生ず，後に化して胡蝶となる.」と触れるところであったが，『大和本草』をテキストとする講義をしていた小野蘭山 (1729—1810) は，『大和本草批正』(蘭山口授，井岡冽筆記の講義録) 人の巻，蠋の条において，「菜葉を生ずるは即ち蝶の卵を生みつけたるなり．其（の）卵，黄色なり．ながむしとなりては，緑色にして毛あり，黄色（♀のことか？）白蝶の蝶に化す.」と，*Pieris* の卵と幼虫を詳らかにしている．さらに蘭山は，頗る観察に努力を注ぎ，『本草綱目啓蒙』(初版 1803，重訂版1847) 巻の36，蛺蝶の条にいたって，

「油菜葉の上，或（い）は下に繊小の黄卵を生ず．数日の後，化して小長虫となる．緑色にして毛あり，日を歴れば漸く長じて一寸許，老するものは蛹となりて，葉背茎極，或（い）は屋壁の間に懸る．其（の）蛹長さ七八分，上豊（か）にして尖稜あり，下は稍痩（せ）て足なく，浅褐色なり．上は両腰より糸を出して，茎葉に粘し，

下は尾を粘す．是，爾雅に謂ゆる蜆は縊女なり．数日の後，背上自ら裂（け）て羽化し，出て黄蝶（♀？）粉蝶となる.」ときわめて綿密に，モンシロチョウ幼虫とみられるものを観察記載している．

総　　括

往時の白い蝶の古記録をたどって，今日，その種類を考証るすことは，困難で不完全であるが，次のように要約することができる．

1．『懐風藻』の「素蝶」(701～705頃）が最もはやい記録（但し，モンシロチョウとスジグロシロチョウの区別はない)．

2．円山応挙の写生帳（1776）の図が正確にモンシロチョウをえがいており，もっともふるい．絵画には，さらに，年代の古いモンシロチョウの図が発見される可能性がある．

3．モンシロチョウの分布した時代を考えるために，食草の古い記録をたどることは，あくまで参考であって，直接的ではないが，可能範囲を拡大することができた．

4．小野蘭山の幼虫の記事（1803以前）は，確実にモンシロチョウ幼虫と思われ，『貞享暦』(1684）までさかのぼれるかも知れない．

以上をモンシロチョウの古記録に関する私見の要綱とする．

文献の渉猟の後に考えられることは，モンシロチョウの分布が，わが国におよんだのは，いつ頃かということである．八木誠政博士（1894—1967）の『昆虫学本論』(1957）第8章，「分布，種の分化と進化」に，「モンシロチョウの幼虫は，アブラナ科植物をもって食物としているが，これの分布は人類の運搬によって，菜類栽培地帯に広まって行ったのであろう．故に現今はこれが欧州を初めとしてアジア，北米（1860)，オーストラリア，ニュージーランド，ハワイ等にまで分布している．これらは人類の栽培するアブラナ科植物が主要な食料であって，野性のアブラナ科植物を追って分布したものではない.」と，モンシロチョウの分布型を示され，また，同博士は『生態学汎論』(1960）第7章，「種の分化と生態」において，電子顕微鏡を用いた，モンシロチョウの代表的地方亜種の，鱗片内色素の研究をこころみ，♀鱗片内の針状色素の形状は，アムール産と日本内地産のものと，きわめて類似したものであるとされたことから考えてみて，モンシロチョウのわが国における分布のはじまりは，古墳文化時代（5世紀を中心とした前後約300年間）に中国大陸から，朝鮮半島を経由して，わが国への帰化人によって，栽培アブラナ科植物がもたらされた際，これらの食草とともに，渡来をみたものとすることも可能のように思われる．記して後考をまつ次第である．いまは，モンシロチョウの古い記録を明らかにして，この小稿の筆をおくこととする．

付記　投稿後，大阪市立自然科学博物館の日浦勇氏は，「モンシロチョウ属の歴史」(『昆虫と自然』Vol.3, No.5, 1968）を発表された．これは，わが国の*Pieris*属の分布・生態・形態変異などを，歴史的な視点で把握され，わが国のモンシロチョウが渡来種であることを主張される，傑出した論文である．

また，浮世絵を研究されている大阪市の今中宏氏は，畢生の仕事として，美術にみられる蝶図の調査をすすめられ，順次発表される日も近いと思われる．応挙より年代の古いモンシロチョウの古図の，みいだされることを期待したい．

Summary

The author attempts to identify the white butterflies as appearing in old Japanese drawings and literary works, with emphasis on *Pieris rapae crucivora* BOISDUVAL.

1) The word 'So-chô' found in a poetical work entitled 'Kaifûsô' published between 701 and 705 A. D. is the earliest reference to white butterflies so far known.

There is no telling, however, whether the word meant *Pieris rapae* or *P. melete*.

2) What is believed to be one of the earliest illustrations of *P. rapae* is a sketch by ÔKYO MARUYAMA, done in 1776.

3) The life of larva, which was depicted by RANZAN ONO (ca. 1803), probably concerned *P. rapae*.

We may trace this line back to 'Jôkyô-reki' (1684).

The late Dr. NOBUMASA YAGI, as well as Mr. TARO IWASE, president of L. S. J., maintained that *P. rapae* had fortuitously been introduced into Japan.

The author subscribes to this opinion. The supposed time of arrival of this species to Japan is, in his opinion, during the Kofun (ancient tomb) Age (ca. 300—600 A. D.).

The cultivated rapa plant is believed to have been brought into this country by the immigrants, from the Chinese Mainland by way of the Korean Peninsula, and the whites must have accompanied the plant in some form or another, at the younger stages.

ウラミスジシジミ幼虫の発育日数

長沢純夫・中山 勇
清水市有東坂 601・北脇 88-34

長野県湯田中において採集したウラミスジシジミ *Wagimo signata* BUTLER の卵から，ふ化した幼虫を，静岡県清水市において，クヌギの花芽をあたえて，温度 16～21° C の実験室と，温度25° C，関係湿度 60 %，130 lux 連続照明の飼育室の条件下で，個体別に飼育した．その結果は第１表のごとくで鈴木 (1965) の北海道釧路市における飼育成績，宮川 (1966) の広島県芸北町におけるそれに比べるとふ化日はかなり早く，また発育所要日数は釧路より長く芸北との比較では短いようである．ここにはしめさないが第１～３令までの頭蓋の脱皮殻の幅と，第１～４令までの額面の幅の令間成長は，ともに１次式をもってしめすことができた．

第1表 ウラミスジシジミの飼育成績

飼育年次	温度	性	ふ化日	幼虫期間 I	II	III	IV	合計	蛹期間 (日)	蛹重量 (mg)	前翅長 (mm)
1967	実験室	雌	18/III	10	7	6	11	34	20	195.4	20.2
			18/III	6	6	7	12	31	—	—	—
			平均	8.0	6.5	6.5	11.5	32.5	20	195.4	20.2
		雄	16/III	7	5	6	12	30	23	160.2	19.6
			17/III	7	5	7	13	32	21	154.9	20.1
			18/III	7	5	7	13	31	21	147.1	19.1
			18/III	6	6	6	13	31	21	141.9	19.0
			平均	6.8	5.3	6.5	12.5	31.0	21.5	151.0	19.5
	飼育室	雌	20/III	3	3	4	7	17	—	165.1	—
			22/III	3	3	4	7	17	15	120.1	18.5
			平均	3.0	3.0	4.0	7.0	17.0	15.0	142.6	18.5
1968	実験室	雌	18/III	8	5	6	10	29	20	—	20.0
		雄	20/III	7	6	5	10	28	20	—	19.0